

新琵琶湖博物館創造基本計画

湖をめぐる博物館の「森」構想 ～博物館の「木」から地域の「森」へ～



平成 26 年 (2014 年) 3 月

滋賀県

目 次

1	基本計画の策定にあたって	・・・	1
2	琵琶湖博物館 17 年の実績と課題	・・・	4
3	リニューアルの方向性	・・・	10
4	展示交流空間の再構築	・・・	12
	(1)琵琶湖の魅力を発信し、現在とつながる展示空間	・・・	12
	(2)見える・伝わる・広がる交流空間・交流機能	・・・	22
5	利用者の利便性・快適性を高める施設整備	・・・	26
	(1)ICT（情報通信技術）の活用	・・・	26
	(2)ユニバーサルデザインの推進	・・・	27
	(3)利用者の安全に配慮した施設整備、効率的な維持管理	・・・	27
6	多様な主体との連携		
	(1)地域との連携	・・・	28
	(2)学校との連携	・・・	28
	(3)関係団体との連携	・・・	28
	(4)企業・大学との連携	・・・	29
7	効果的な広報・営業活動の展開	・・・	30
	(1)広報・営業活動の強化	・・・	30
	(2)アクセスの向上	・・・	31
8	事業規模およびスケジュール、期待される効果	・・・	32
	(1)事業規模およびスケジュール	・・・	32
	(2)来館者数の予測	・・・	32
	(3)経済波及効果	・・・	33
	(4)博物館の「木」から地域の「森」へ	・・・	34
	<新琵琶湖博物館創造検討経過>	・・・	36
	<資料>用語の解説	・・・	37

1 基本計画の策定にあたって

(1) 琵琶湖博物館 17 年間の取り組み

琵琶湖博物館は、湖と人間の関係を過去にさかのぼって研究・調査し、資料を収集・整理し、その成果を展示や交流活動を通じて発信することにより、湖と人間の望ましいあり方を県民とともに考える博物館として平成 8 年 10 月に開館しました。

それまでの博物館像にとらわれず社会の期待の一步先を行く博物館として、「湖と人間」というテーマでオリジナルな研究成果をもとに展示を作り上げ、また、全国の博物館に先駆けて交流事業を博物館活動と位置づけて「はしかけ*1」や「フィールドレポーター*2」といった地域の人びとが博物館活動に主体的に参加する制度を創設し、開館以来、全国的に高い評価を受けてきました。

その後、研究・調査は進展し、湖と人間のかかわりについて新しい考え方や研究成果が蓄積されるとともに、県政課題や県民ニーズの高い課題についても研究が進み、成果は行政施策に活用されてきました。また、多様な交流活動を通じて地域の人びととの協力関係が構築され、博物館活動の基盤が形成されてきました。さらに、開館当初から国際学芸員を配置し、海外博物館との共同研究を積極的に推進するなど国際的な博物館活動を展開してきました。あわせて、収集した資料・標本を分類してインターネットで公開するなど成果の発信にも努めています。

このように、開かれた博物館をめざしてきた結果、小中学生の環境学習をはじめ、研究・生涯学習・観光の場として多様な人びとに利用していただき、平成 24 年 6 月に来館者数は 800 万人に達したところです。

(2) 社会的背景の変化と新博物館への社会的要請

開館以来 17 年が経過し、琵琶湖博物館を取り巻く社会状況も大きく変化してきました。時代は少子高齢化・成熟化・ふるさと回帰社会へと変化し、人びとの地域社会への関心が高まるとともに、環境に関する価値観も多様化してきました。また、府県域にとどまらない自然共生型社会づくりなど、広域的な環境保全への要請が強まるとともに低炭素社会の実現に向けた社会的な動きも生まれ、博物館に対する新しいニーズ・期待が高まっています。

一方、県では平成 12 年に琵琶湖の総合保全の指針となるマザーレイク 21 計画*3 が策定され総合的な施策が推進されるとともに、生物多様性*4 や生態系サービス*5、持続可能社会*6 などの新たな環境概念が社会的に認知されるようになりました。さらに、平成 23 年にはマザーレイク 21 計画の第 2 期改定があり、「琵琶湖流域生態系の保全・再生」と「暮らしと湖の関わりの再生」が二つの柱となり、琵琶湖の総合保全は新たな段階を迎えています。

こうした社会的な変化の中、設立当初から「湖と人間」をテーマに取り組んできた琵琶湖博物館は、これまでの蓄積と成果を生かし、現在検討中の第四次滋賀県環境総合計

1 基本計画の策定にあたって

画において基本目標に掲げられている『環境の未来を拓く「人」・「地域」の創造』の実現に向け、主体的に実践・行動できる人育ち・人育てによる持続可能な社会づくりを目指し、環境学習の拠点機能を生かした取組を進めることが求められています。

琵琶湖博物館の『地域の人びととともに「湖と人間」の新しい共存関係を築いていく』という使命を達成するためには、「湖と人間」のあり方を県民とともに考え、ともに行動し、人づくりに貢献する博物館として、過去・現在・未来をとらえなおし、「湖と人間」の共存のあり方を新しい常設展示で提示していく必要があります。また、交流の場としての博物館から、地域での実践・行動を担う人が育つ博物館へと進化していく必要があります。

(3) 博物館の「木」から地域の「森」へ

こうしたことから、琵琶湖博物館では開館以来実施してきた館内アンケート調査や新たに実施したマーケット調査を踏まえ、また、県民ワークショップや外部有識者からも意見をいただき、平成24年度に「新琵琶湖博物館創造ビジョン」を策定し、リニューアルの方向性を明らかにしました。

同ビジョンでは、『博物館の「木」から地域の「森」へ』という構想をまとめました。これまで琵琶湖博物館は研究・調査や交流などの活動を通じて(1)で述べたとおり多くの成果を生み出し、地域社会の中で一定の役割を果たすようになってきました。つまり、幼木からスタートした琵琶湖博物館は成木になったといえます。

リニューアルでめざす新琵琶湖博物館は、展示交流空間の再構築を通じてより多くの人びとに琵琶湖博物館を利用していただくことにより、地域の人びとの一人ひとりの心に「種子、挿し木、幼木」を渡していく博物館、親木となる博物館をめざします。そして、将来あるべき姿として、琵琶湖とその集水域および淀川流域の自然・歴史・暮らしへの理解が深まり、地域の人びととともに「湖と人間」の新しい共存関係を築いた社会の実現、言わば『湖をめぐる博物館の「森」の誕生』をめざします。

(4) 基本計画の策定

湖をめぐる博物館の「森」が一層広がっていくためには、琵琶湖博物館が琵琶湖や環境に関する県民の心のよりどころとなり、関西の命の水を湛える琵琶湖の象徴施設、さらに「飲水思源*7」の思いを下流府県の人びとと共有する場として、その存在感を県内外で高めていく必要があります。

琵琶湖博物館が、環境先進地域「関西」をリードする環境学習と情報の収集・発信の拠点として、また、地域に根ざしながら広く世界を視野に入れた研究・交流のネットワーク施設としてその使命を果たすとともに、より多くの人びとに利用していただくことをめざし、「新琵琶湖博物館創造基本計画」を策定します。

1 基本計画の策定にあたって

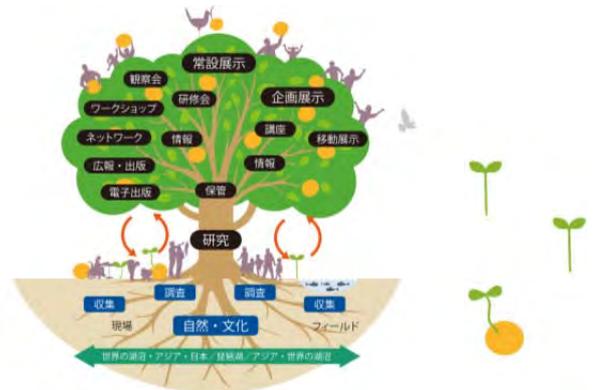
～博物館の「木」から地域の「森」へ～

<今の琵琶湖博物館>

成木になった琵琶湖博物館

研究・調査や交流活動などにより、多くの成果を生み出してきた一方で、展示構造が固定的なため、それらの成果を生かしきれていない課題に直面している。

より魅力的な交流プログラムなどの開発も含め、時代に即した情報受発信力の強化を求められている。

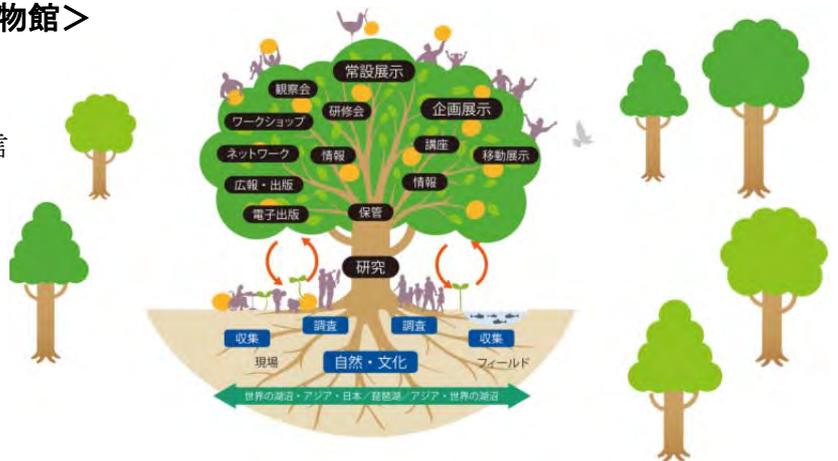


<リニューアルをめざす新琵琶湖博物館>

親木となる琵琶湖博物館

展示交流空間の再構築を通じて、タイムリーでわかりやすい情報受発信の機能を高め、より多くの人びとに琵琶湖博物館を利用してもらう。

地域の人びと一人ひとりの心に「種子、挿し木、幼木」を渡していく博物館をめざす。



<将来的な地域の姿>

湖をめぐる博物館の「森」の誕生

琵琶湖とその集水域および淀川流域の自然、歴史、暮らしへの理解が深まり、地域の人びととともに「湖と人間」の新しい共存関係を築いた社会の実現。



『新琵琶湖博物館創造ビジョン』より

2 琵琶湖博物館 17年の実績と課題

(1) これまでの実績

1) 博物館の基礎的機能

◆研究・調査

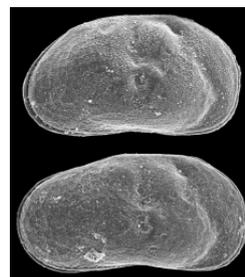
- 博物館活動の根幹は研究・調査であると位置づけ、「湖と人間」をテーマとする学際的・総合的な課題に取り組む総合研究10件、外部研究者とともに行う共同研究85件を実施し、成果を専門誌等への論文として1,421件、一般向け誌面に1,826件公表し、「湖と人間」のかかわりについて新たな考え方や理解が進展してきました。
- 研究・調査により、琵琶湖や滋賀県でプランクトンや昆虫などの新種*8を53種、新記録種*9を152種、計205種類の生き物を発見しました。
- 県政課題や県民ニーズの高い課題について研究を行い、その成果は環境保全型農業、希少種保護や水草対策など行政の施策に活用されてきました。
- 水族施設に保護増殖センター*10を併設し、天然記念物や絶滅危惧種など約40種類を系統繁殖するなど、日本を代表する希少淡水魚類の系統保存*11・研究施設となっています。



研究調査報告書*12



水草の調査



カミジンコの新種*13

◆展示

- 企画展示*14を21回、ギャラリー展示*15を40回、地域の人びととの協働により開催し、地域との協力関係が構築され、博物館活動の基盤が形成されてきました。
- 「湖と人間」のより良い共存関係を目指した、世界を視野に入れた意欲的な展示が好評を博し、これまでに800万人以上が来館しました。



企画展示



ギャラリー展示



トンネル水槽

2 琵琶湖博物館 17 年の実績と課題

◆交流

- 観察会・体験教室・講座を年間200回以上開催し、学習機会の充実を図り、地域における博物館の存在基盤を確立してきました。
- 市民参加型博物館として、全国に先駆け博物館の事業・研究に地域の人々が自主的にかかわる「はしかけ」や「フィールドレポーター」制度を構築し、他館のモデルとなるとともに、国内外で高く評価されてきました。
- 企業の生物多様性研修、社内ビオトープ*16といった企業の社会貢献活動の取り組みに積極的に協力・助言等を行ってきました。
- こうした取り組みにより、博物館活動が地域へ広がる芽が育ってきました。



観察会



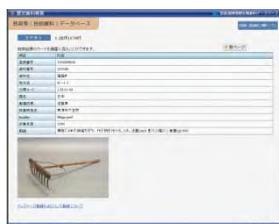
はしかけの活動



フィールドレポーター交流会

◆資料整備

- 質・量とも日本屈指を誇る民具コレクション*17をはじめ、地学資料、生物資料、歴史資料等について、貴重なコレクションを含め計85万点の標本・資料を収集し、45万点を整理してきました。
- 水族展示は、魚類を中心に約170種、17,000点を飼育しており、淡水生物を扱う施設としては日本最大級の規模となっています。
- インターネットでも検索できるよう資料データベース*18を17分野、学習に役立つ電子図鑑*19を8分野、整備し、公開しています。
- 琵琶湖博物館の活動や価値が認められ、多数の標本・資料を地域の人々から寄贈していただき、交流や地域活動など多様な資料利用の要求に対応できる基盤が整ってきました。



データベース



寄贈いただいたミエゾウ*20の歯



長期展示に成功したマミズクラゲ*21

2 琵琶湖博物館 17 年の実績と課題

2) 博物館の多面的機能

◆環境学習・生涯学習の拠点として

- 県内小学校の7割超が利用し、学習効果の高い施設として高い評価を受けてきました。生涯学習施設として他府県・外国から多くの見学、視察、研修を受け入れています。



夏休み自由研究講座*22



館内でのフロアトーク*23



交流事業

◆文化・観光の拠点として

- 文化・観光施設として県内観光入込客数が20位であり、文化施設としてはトップとなっています。



コンサートの開催



館でのテレビロケ



周辺の美しい景観

◆国際研究・交流の拠点として

- 開館以来、国際学芸員を擁する博物館として海外博物館との共同研究、海外学芸員の受入れ等国際的な研究活動を行ってきました。



湖南省博物館と琵琶湖博物館との連携協力に関する協定調印式



JICA研修生の料理体験



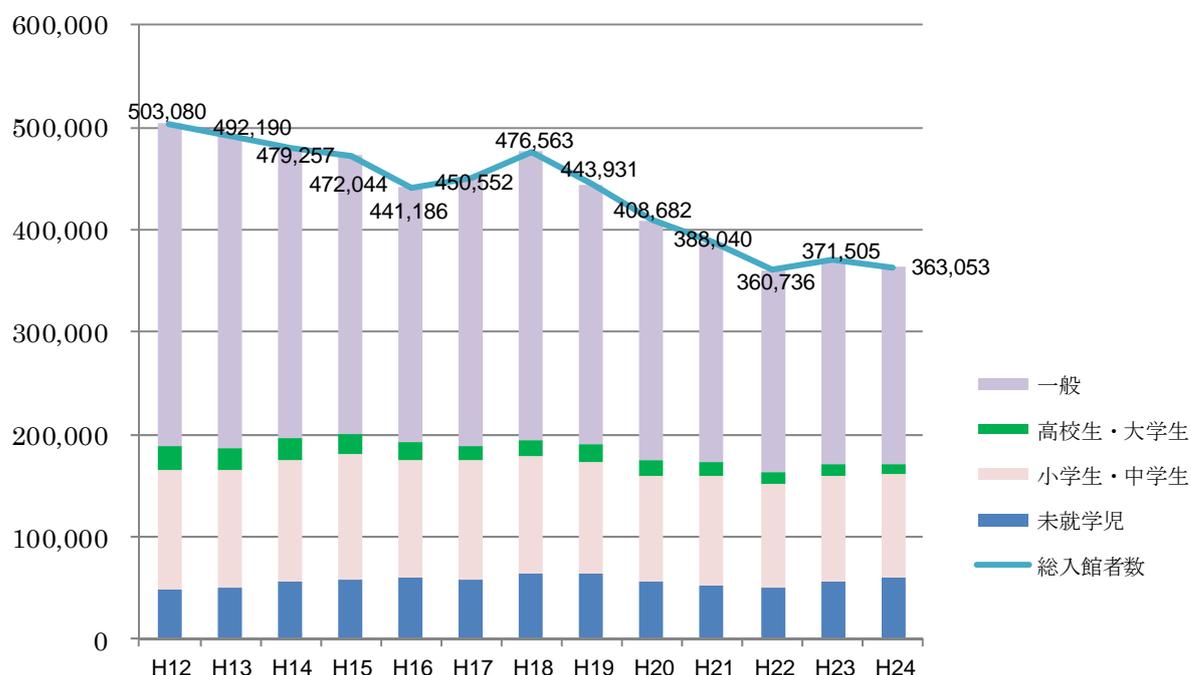
日仏共同企画*24「フェアブルにまなぶ」展 オープニングセレモニー

(2) 課題

1) 来館者減少への対応

◆来館者減少の状況

○ 地域に根ざした活動が深まり、広がりを見せる一方で、平成12年度に50万人だった年間来館者数が平成24年度には36万人に減少しています。年間総来館者数の減少は「一般」(大人)の来館者の減少分とほぼ一致しています。



◆マーケット調査から見えてきた課題

リニューアルに向け、琵琶湖博物館に対する評価やニーズ、期待等を探るため、開館以来継続して実施してきた「来館者アンケート調査」を分析し、また、新たに「インターネット調査」および「館内アンケート調査」を実施しました。

その結果、次のような課題やニーズが明らかになりましたので、対応が求められるターゲット層を定め、利用者数の向上に向けて取り組むことが求められます。

マーケット調査から見えてきた課題

- ・ 県内では琵琶湖博物館をよく知っている人は7割弱だが、近隣の他府県では「知らない」人が7割
- ・ 「かわりばえない」「情報が最新でない」といった展示に対する意見が近年増加
- ・ 琵琶湖博物館に来館したことのない人からは、大人が満足できる深い知識が得られる展示やイベント、魅力的なレストランやミュージアムショップ、季節の花や豊かな自然と触れ合える庭園への要望が多い
- ・ 来館者からは子どもたちが楽しめる展示やイベント、親子で楽しめる展示やイベントへの要望が多い
- ・ ここでしかない展示、「何度でも行きたくなる」展示や更新性、親子や幅広い年代が楽しめる参加・体験型の展示やイベントへの期待が高い

対応が求められるターゲット層と利用者数の向上に向けた取り組み

- ① 大人の潜在利用者層：魅力を伝える情報発信力の強化、大人が一人でも利用したいと感じ、楽しめる展示・レファレンス機能*25
- ② 親子利用者層：親子で楽しめる展示やイベント、大人になっても利用したいと思わせる展示・体験空間の提供
- ③ 観光客：観光客が興味を抱く展示・イベント、季節ごとに楽しめる屋外体験の充実、周辺観光スポットとの連携

2) 常設展示の情報発信力の低下

- これまでの研究・調査成果や実物資料を、多くの人が利用できる常設展示に活用していくことが求められています。
- 地域の人びととの協働を進め、参加型・体験型展示により、来館者にフィールド*26の魅力やおもしろさを伝え、地域での活動のきっかけを提供する発信力の高い新たな展示へのニーズが高まっています。
- 環境に対する考え方や価値観が多様化し、また、生物多様性や持続可能社会などの新たな環境観が社会的に認知されるとともに、外来生物の移入、鳥獣害の深刻化などの新たな環境課題が明らかとなり、それらに対応する学びや情報発信の場が求められています。

3) 人が育つ環境学習の拠点機能への必要性

- 近年、博物館活動への参加者に固定化傾向がみられるため、だれもが気軽に参加でき、多様な関わり方で自らを発見し、実践できるよう、利用を拡大するための新たな取り組みが求められています。
- 環境への関心と問題解決能力を高め、持続可能な社会づくりに向けて主体的に実践できる人を育む環境学習の拠点機能の強化が必要となり、「交流の場」としての博物館から地域での実践を担う「人が育つ」博物館へ進化していくことが求められています。

4) 少子高齢化・成熟社会への対応

- 少子高齢化が進み、高度成長の時代から生活の質を重視する成熟の時代へと変化し、人々のふるさと回帰が進み、博物館の新たな利用ニーズが高まってきました。昔懐かしい民俗資料等を活用した高齢者の癒しの場・元気を取り戻す場、高齢者と子どもたちの交流の場など、博物館の新しい活用のあり方の提示が求められています。

5) 琵琶湖・淀川流域から広く世界を視野に入れ「湖と人間」を考える場に

- 琵琶湖や環境に対する県民のよりどころ、母なる湖「琵琶湖」の象徴施設として、琵琶湖博物館の存在感を県内外で高めていく必要があります。
- 広域的な環境保全の要請が高まり、関西の命の水を湛える滋賀県として、『飲水思源』の想いを下流府県の人びとと共有する必要があります。
- 琵琶湖・淀川流域における博物館ネットワークの拠点として、環境学習への取り組みや情報受発信力の強化が求められています。
- I L E C（国際湖沼環境委員会）や海外博物館等との連携を強化し、アジアをはじめ世界の湖沼研究の窓口となることが期待されています。

6) 施設整備にかかる必要性

- 開館以来17年の経過とともに、施設設備の老朽化、機能低下が進んでいます。しかし現在では、設備に関してはエネルギー効率の良いもの、ユニバーサルデザイン*27の考え方を生かした技術などが進化し、環境に配慮した、利便性の高い施設設備が多く開発され普及してきています。このような中で、多数の人が来館する施設として、安全・安心の確保、また障害のある方や外国人などだれもが快適に過ごせるような基本的サービスの向上、機能充実のための施設設備の整備が求められています。

(1) 新琵琶湖博物館の役割

琵琶湖博物館はリニューアルでこんな博物館をめざします！

1 「湖と人間」のあり方を県民とともに考え、ともに行動する博物館

マザーレイク 21 計画第 2 期の二つの柱である「琵琶湖流域生態系の保全・再生」、「暮らしと湖の関わりの再生」の実現に向けて、琵琶湖の大切さに気づき、主体的な行動を起こす人びとを応援します。

2 次代を担う人が育つ拠点となる博物館

県民ニーズに応え、県政の課題や高度化・複雑化した情報をわかりやすく伝え、体験・交流の機会を数多く提供することで、湖と人間が共存する持続可能な社会の実現に向けた次代を担う人が育つ場となります。

3 地域活性化の核となる博物館

琵琶湖博物館は博物館であると同時に研究施設、文化施設、環境学習施設、観光施設であるという多面性を生かし、琵琶湖・滋賀を県内外に発信し、県のアイデンティティを高め、地域活性化の核となる施設をめざします。



～ 博物館の「木」から地域の「森」へ ～

○地域の問題を自分のこととして理解し、琵琶湖の大切さに気づき、琵琶湖の未来を新たな視点で考える人びとが増加し、次代を担う人が琵琶湖博物館から育ちます。

○博物館利用が促進し、暮らしの中に博物館が定着し、地域で新たな活動が生まれ、それが広がり、琵琶湖博物館を拠点としたネットワークが構築されます。

(2) 博物館活動の根幹である研究・調査の今後の方向性

これまで琵琶湖博物館ではオリジナルな研究を行い、その成果を、展示や資料整備、交流を通じてわかりやすく発信してきました。蓄積してきた研究成果を踏まえ、活動を発展させるため、学際的・地域的な研究の推進により、「湖と人間」というテーマに沿って地域の人びととともにさらに研究を進展させます。また、国内外の博物館や研究機関との交流・連携を強化し、国際的な研究の進展をはかります。

(3) 展示交流空間のリニューアルの方向性

1) 展示交流空間の再構築にかかる新たなコンセプト

高度化・複雑化した情報をわかりやすく、
タイムリーに伝える博物館

大人も日常的に楽しめる、
活用できる博物館

2) リニューアルの方向性

- 可変性のある展示空間で、新たな知見、次々と生じる環境課題等についてわかりやすく情報を提示し、タイムリーな展示を行います。また、来るたびに新たな発見や学びがあるよう、展示室や屋外空間を活用するさまざまなプログラムを用意します。
- 年齢、関心などが異なるさまざまな利用者が、それぞれに合った活用、楽しみ方ができる空間をめざします。多くの実物資料による展示、来館者同士の交流の場の増加により、大人にとっても自主的な学びや活動の広がりを促す空間とします。
- 子ども、高齢者を含む一般来館者、身近な自然の不思議や歴史・生活・文化の魅力を調べてみたいさまざまな利用者にとって、多くの発見や交流、学びと楽しみの機会に満ちた空間となるリニューアルをめざします。

1 常設展示の再構築

体験的な展示を多く取り入れ、琵琶湖の魅力の発信力を強化します！

- ・ 発信力の高い展示
- ・ 参加型、体験型の展示
- ・ 県民ニーズ、最新課題に対応した展示
- ・ 地域の人びとと創り上げる展示
- ・ いつ来ても新鮮な展示

2 交流空間・交流機能の再構築

参加と発見、対話と交流を促し、次代を担う人が育つ交流の拠点となります！

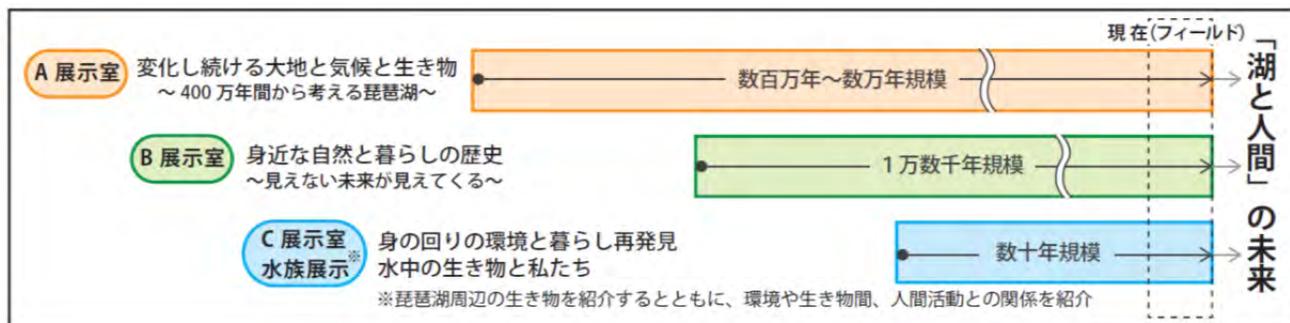
- ・ 学びと発見の体験交流
- ・ 博物館と地域をつなぐ交流
- ・ 実践へつなぐ環境学習
- ・ 琵琶湖へ誘う屋外交流空間

(1) 琵琶湖の魅力を発信し、現在とつながる展示空間

1) 新展示の考え方

◆「湖と人間」の未来を考えることができる展示

- 琵琶湖の「現在」をとらえなおす3つの時間スケール*28で自然や人びとの暮らしの変化、そのつながりを伝え、琵琶湖の過去からいま、そして未来を考える多様な視点を提示します。



2) 新展示の特徴

◆「つながり」を紹介することで自分とのかかわりに気づく

- 山、川、田んぼ、湖、そこにすむ生き物たち、そしてわたしたち自身やその暮らしは、お互いに「つながり」を持ち、すべてが長い時間を経て、「いま」という時に存在しています。これまでの展示は、環境・生き物・人間活動それぞれの関係性に着目しながらも、そのつながりを十分に表現できていませんでした。
- こうしたことから、新展示では、過去と現在・展示内容と来館者との「つながり」を伝えることに重点をおき、さまざまな環境・生き物・人間活動の関係性をわかりやすく展示し、自分とのかかわりに気づくことができる展示とします。

◆「いま」の展示でフィールドへ誘い、「湖と人間」の未来を考える

- 歴史=過去と捉えられることが多かった一般的な博物館展示と異なり、新展示では歴史を「いま」と未来を考える手がかりとして位置付け、「いま」の視点を持ちながら歴史を見直し、「湖と人間」の未来を考える展示とします。3つの異なる時間スケールで「いま」を理解することにより、環境や暮らしは一定なものではなく、過去から未来にむかって変化しつづけるものであることを伝えます。
- 新展示では今フィールドで見ることができるトピックを積極的に扱い、また、フィールドの魅力を一番よく知る地域で暮らし、活動する人びととともにフィールドを紹介するコーナーを設けることにより、「いま」があるフィールドへ人びとを誘います。

◆交流や対話がうまれるにぎわいのある展示室

- 琵琶湖博物館は、単なる展示解説員にとどまらない「展示交流員*29」をおくなど、展示室で交流が生まれることを重視してきました。新展示では、地域を知る人びとと展示を行い、来館者との対話と交流を促し、また、各展示室に博物館職員や地域の人びとと来館者が語り合うことのできる交流スポットを設置することにより、展示室での交流をさらに深めます。

3) 新しい展示手法

◆交流スポット = 「いま」とのつながりを語り合う

- A展示室・B展示室・C展示室の中央部に、博物館スタッフを含め、地域の人びとや来館者らがふれあい対話する「交流スポット」を設けます。実物を用いた「お話し会(仮)」などを催すほか、来館者が自分自身で楽しめるハンズ・オン展示*30を用意します。

◆地域の人びとによる展示

- 地域の人びとによるフィールドの魅力を伝える展示コーナーを設けます。実物展示対応のケースや、展示室での交流が可能な展示ワゴン、地域情報ボードなどを活用し、地域の生の声や発見を届けます。

◆びわはくボックス(可変ボックス) = 「いま」の情報を更新して提示

- さまざまな新しいトピックを発信できる琵琶湖博物館オリジナルの可変式展示ボックス(=びわはくボックス)を企画します。各展示室の一角にボックス台を数台用意、その上の展示ボックスを折々のトピック内容に替えていきます。

※季節展示、ハンズ・オン展示の展示替えにも活用します

◆フィールド・レポート情報 = 「いま」をICT(情報通信技術)で発信

- 利用者制度の1つである「フィールドレポーター制度」などにより、テーマごとの登録者に、自分が発見したフィールド情報を投稿してもらい、それをリアルタイムに近い形で展示にアップしていきます。来館者が季節情報など最新のフィールド情報にふれることができます。

◆ライブ@琵琶湖博物館 = フィールドの「いま」をライブ中継で見せる

- フィールドと展示室、館内施設と展示室をつなぎ、ふだん展示室では見ることができない自然の生態やモノ、フィールド調査、環境に向き合う人へのインタビュー、博物館の裏側を、タイミングをとらえてライブ中継して放映します。

4 展示交流空間の再構築

4) A展示室 : かわりつづける自然と琵琶湖のおいたち

★現状

古い時代から新しい時代にむかって400万年間の琵琶湖の生い立ちを紹介

★課題

時間スケールが長いと遠い過去に起こった出来事と現在の暮らしとのかかわりが意識しにくい展示となっている

★こう変わります

生き物の進化や絶滅、大地と気候の変化など、長い時間スケールにたって初めて見えてくる世界を現在の暮らしとのかかわりとともに紹介し、未来を考える展示となります。



新テーマ: 「変化し続ける大地と気候と生き物 ～400万年間から考える琵琶湖～」

【新展示のねらい】

琵琶湖や生き物を生みだしてきた、数百万年～数万年という長い時間スケールでの自然環境の変化を、自然災害、地球温暖化などの現在の環境問題とのかかわりとともに紹介します。また、長期的な自然の営みという視点からみた、生き物としてのヒトを考えることで、B展示室やC展示室へのつながりをよりわかりやすくします。さらに、地域の博物館や人びとと連携した化石・岩石などの展示コーナーおよび交流を行う空間を設けることで、琵琶湖フィールドの魅力を伝えます。

新しいコーナーイメージ



<変わる気候と森>

- 2.5万年前の寒い琵琶湖地域の氷期*31の気候(夏は19度、冬は-13度)を体感し、旧石器人も食べていた大型の松の実を森で探す、見て・ふれて・感じるコーナー
- 古代湖*32である琵琶湖だからこそ残された湖底の堆積物からわかる気候の変化から、温暖化問題を考える

<地域の人びとによる展示>

- 身近な地域の魅力、様々な発見を、その素晴らしさを最も知っている、地域の人びととともに紹介する展示



<変わる生き物>

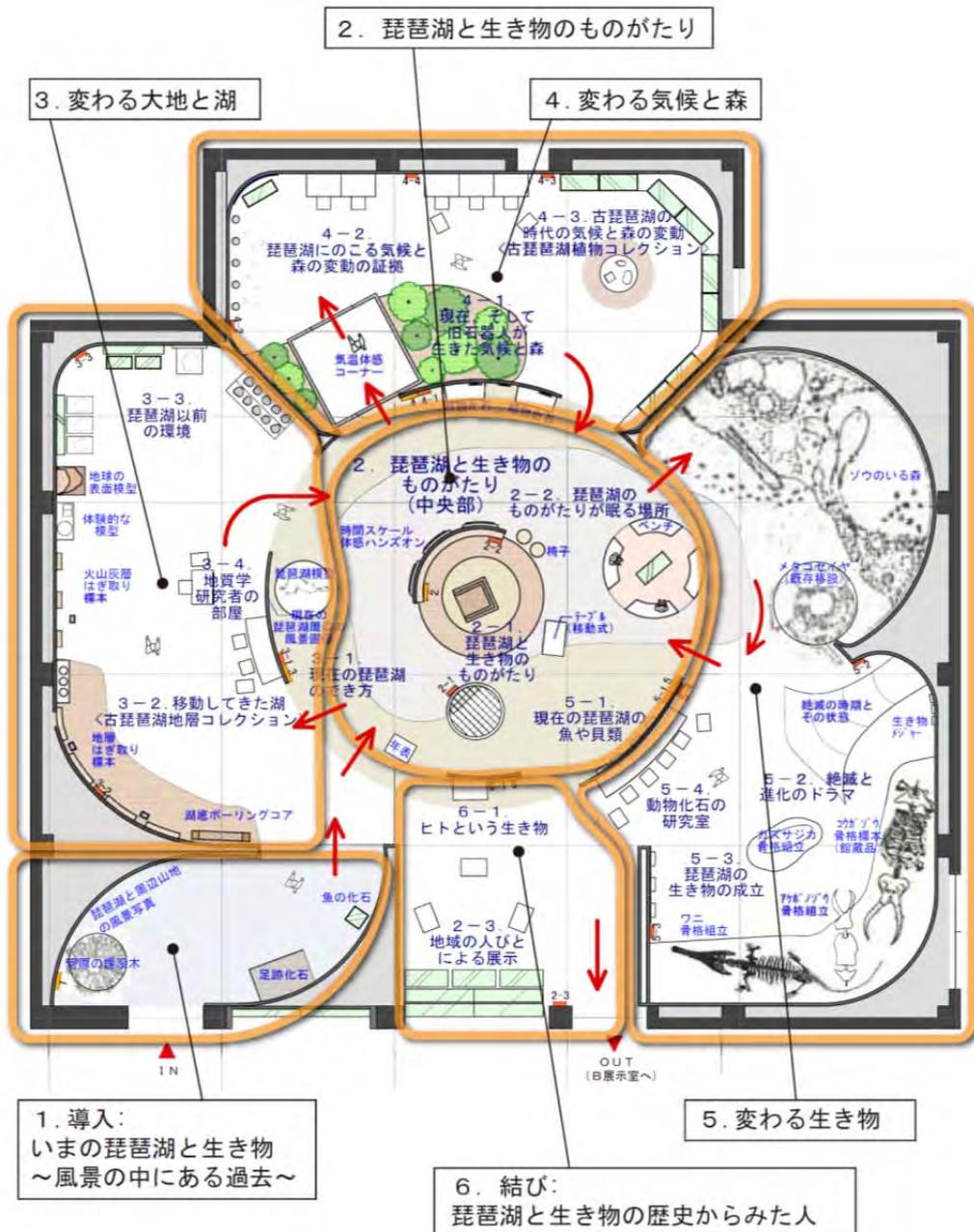
- 琵琶湖やその周辺に生息する動物の起源、ダイナミックな進化と絶滅を、巨大なゾウやワニの化石や骨格標本で紹介
- 過去におこった生き物の絶滅や移入のドラマを通して、現在の固有種*33や移入種の問題を考える

<変わる大地と湖>

- 日本一広い琵琶湖はいつからできたのか? また、近畿・東海地方との水系のつながりはどう変わっていったのか? 災害をおこす地震などの地球の活動との関係とあわせて紹介

4 展示交流空間の再構築

【 A展示室ゾーニングイメージ図 】



4 展示交流空間の再構築

5) B展示室 : 身近な自然とくらしの歴史

★現状

縄文時代以降の人間活動を中心に、湖と人間のかかわりの歴史を生業、交通、漁撈、治水・利水等のテーマで展示

★課題

湖における人間の活動の歴史が中心に展示されており、気候の変動による動植物相の変化など自然そのものの変化や、自然と人間活動の関わりといった視点には乏しい

★こう変わります

歴史展示の中に自然環境という要素を取り入れ、自然環境と自然認識の変化に軸足を置き、自然の変化と人びとの暮らしがどう結びついていたのか示す展示となります。

新テーマ：「身近な自然と暮らしの歴史 ～見えない未来が見えてくる～」

【新展示のねらい】

人が琵琶湖地域で暮らすようになったおおよそ1万数千年～数百年の時間スケールでの身近な自然の変化や人びとのかかわりの歴史を扱います。気候、地殻の変動など関係し合いながら変化し続ける自然のなかで、人間の自然認識と自然と暮らしのかかわり、水田稲作や仏教など主に大陸から導入された新しい文化・技術の受容と独自の文化のはぐくみを二つの柱として、「いま」とは全く異なる自然のとらえ方があったことを紹介します。現在と未来を考える環境学習にも利用できます。

新しいコーナーイメージ



<変わる自然、変わる暮らし>

- 琵琶湖周辺の森林について、縄文時代や弥生時代などの人びとの利用による変化を紹介し、屋外展示にある森へと誘う

<船とともにある暮らし>

- 人びとが生活のために利用していた船が、簡単な形のものから、多くの荷を積み、湖上交通の主役になっていく変遷
- 船大工がするように船釘で板をはぎ合わせて作ってみる体験展示



<殺生をめぐる葛藤>

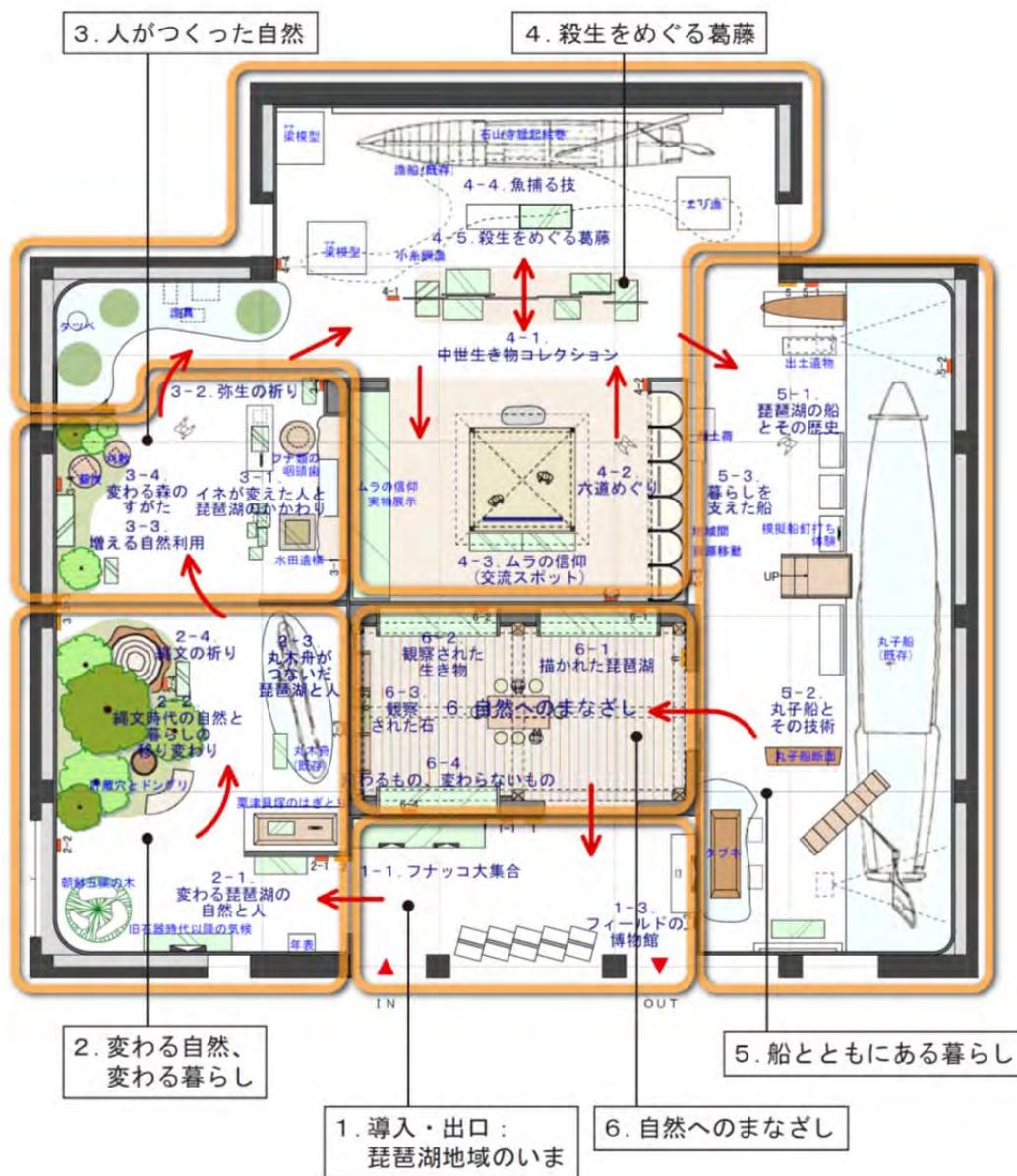
- 当時、人間を含めた生き物が輪廻すると考えられていた六道*34をめぐる探検
- お堂を模した交流スポットで、中世の人になった気分で絵巻物などの解説をうける絵解き体験

<自然へのまなざし>

- 江戸時代のフナを描いた絵画やシーボルトが編集した動物誌『ファウナ ヤポニカ』の図などを見比べながら自分でフナをスケッチしてみる体験

4 展示交流空間の再構築

【 B展示室ゾーニングイメージ図 】



4 展示交流空間の再構築

6) C展示室 : 琵琶湖周辺の環境と人びとの暮らし

★現状

多様なトピックを通じて、主に昭和 30 年代の生活や現在の生態系を示した展示

★課題

トピックの関係性が分かりにくく、また、開館以降の研究成果や最新課題に対応できていない

★こう変わります

身近な景観をとりあげ、関連する新たな発見や課題、季節のフィールド情報などを随時更新して紹介することで、最新課題に対応し、いつ来ても琵琶湖地域のいまを感じられる展示となります。



新テーマ：「琵琶湖地域のいま ～身の回りの環境と暮らし再発見～」

【新展示のねらい】

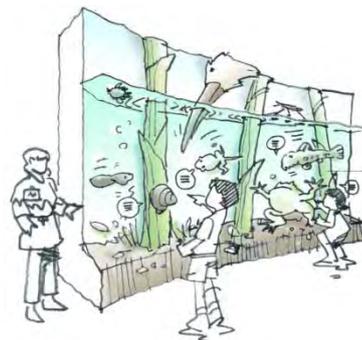
沿岸域から山地までの身近な景観を入りに、関連するトピックと環境・人間・生き物の関係性をわかりやすく示し、高度経済成長期以降に起こった重要な変化を紹介することで、現在をとらえなおし、未来を考える展示となります。身の回りの世界の中に潜むおもしろさを知ってもらい、博物館の屋外展示や交流事業とつなぎ、魅力あるフィールドへ誘います。

新しいコーナーイメージ



<ヨシ原を歩いてみると>

- ヨシ原の多様な生き物たちの生きている姿の展示や、ヨシ原の利用や保全活動などを紹介し、フィールドへ誘う
- ヨシ原や湖岸の変貌を紹介し、見慣れた景観を考えるきっかけを提示



<田んぼをのぞいてみると>

- 滋賀の田んぼに暮らす生き物たち、田んぼをめぐる人びとの取り組みを紹介
- これからの田んぼや農業、食について考えるきっかけを提示するとともに、フィールドへ誘う

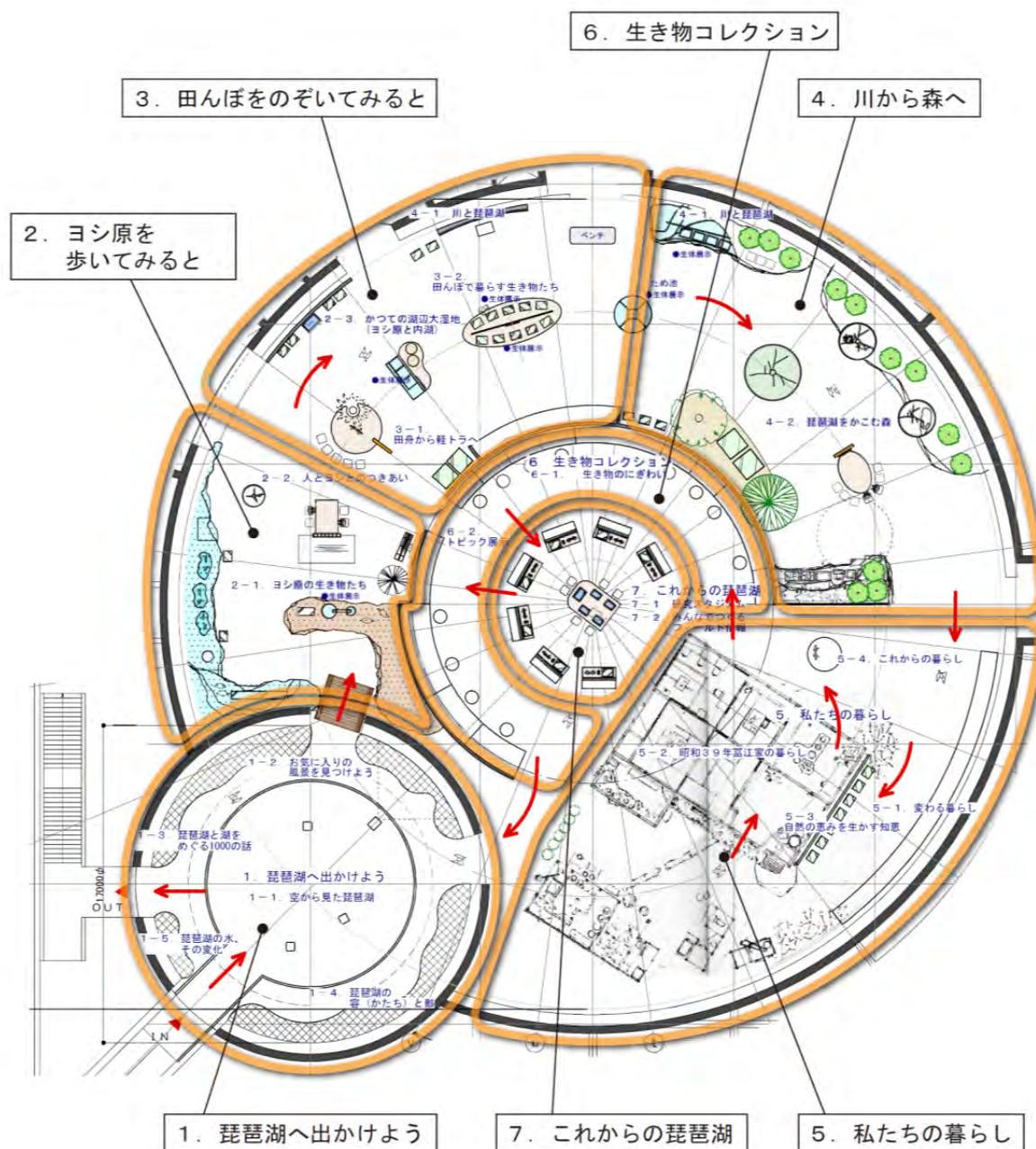


<これからの琵琶湖>

- 各地から集まるフィールド情報をリアルタイムに双方向でやりとりし、面白さを紹介、来館者をフィールドに誘う
- 様々な活動の発表の場、交流のきっかけづくりの場としてのコーナーを設置

4 展示交流空間の再構築

【C展示室ゾーニングイメージ図】



4 展示交流空間の再構築

7) 水族展示 : 淡水の生き物と人びとの暮らし

★現状

琵琶湖と周辺の魚類を中心とした生き物を生体で展示

★課題

生き物の不思議な生態や人間活動との関係性をわかりやすく提示していく必要がある

★こう変わります

琵琶湖の注目すべき魚の生態や行動を紹介します。また琵琶湖の生き物と、漁業、食文化など人とのかかわりを一緒にわかりやすく示す展示となります。



新テーマ: 「琵琶湖地域のいま ~水中の生き物と私たち~」

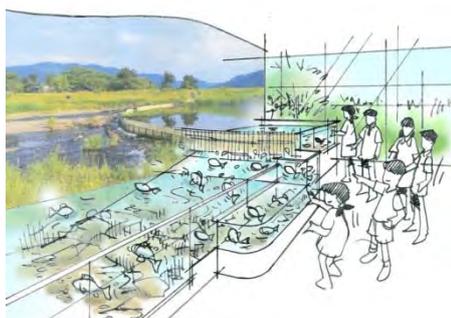
【新展示のねらい】

魚類、甲殻類や水草などをはじめとした琵琶湖に生息する様々な生き物を生きた状態で展示し、各種の特色やそれぞれの生息環境を通じて、琵琶湖のもつ生物多様性や食文化などの「生き物と人とのかかわり」を伝えます。また、季節によって違う生き物とした姿などを展示することで、驚きや発見を促し、暮らしとのかかわりを紹介します。

新しいコーナーイメージ

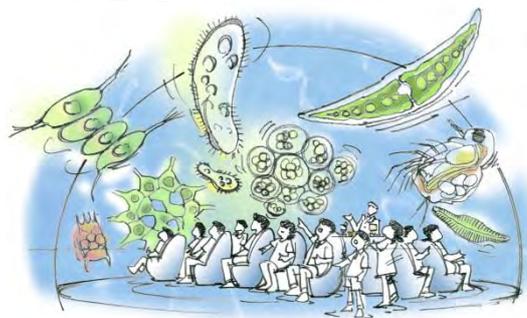
<川の生き物とその環境>

- 琵琶湖下流域を再現した水槽を設置し、アユ、オイカワなどの魚類を生体展示する。またヤナ*35を設置して、それを上がろうとジャンプするアユを見せる



<マイクロアクアリウム>

- 琵琶湖の生態系を支えるプランクトンなどの小さな生物をシアターや顕微鏡で紹介する



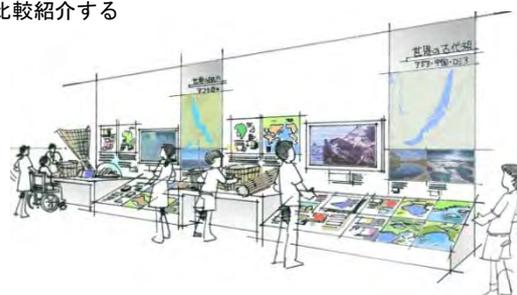
<琵琶湖の生き物と人との関わり>

- 琵琶湖の固有種である魚が泳ぐ水槽とそれらをつかまえる漁法、料理を紹介



<古代湖の世界>

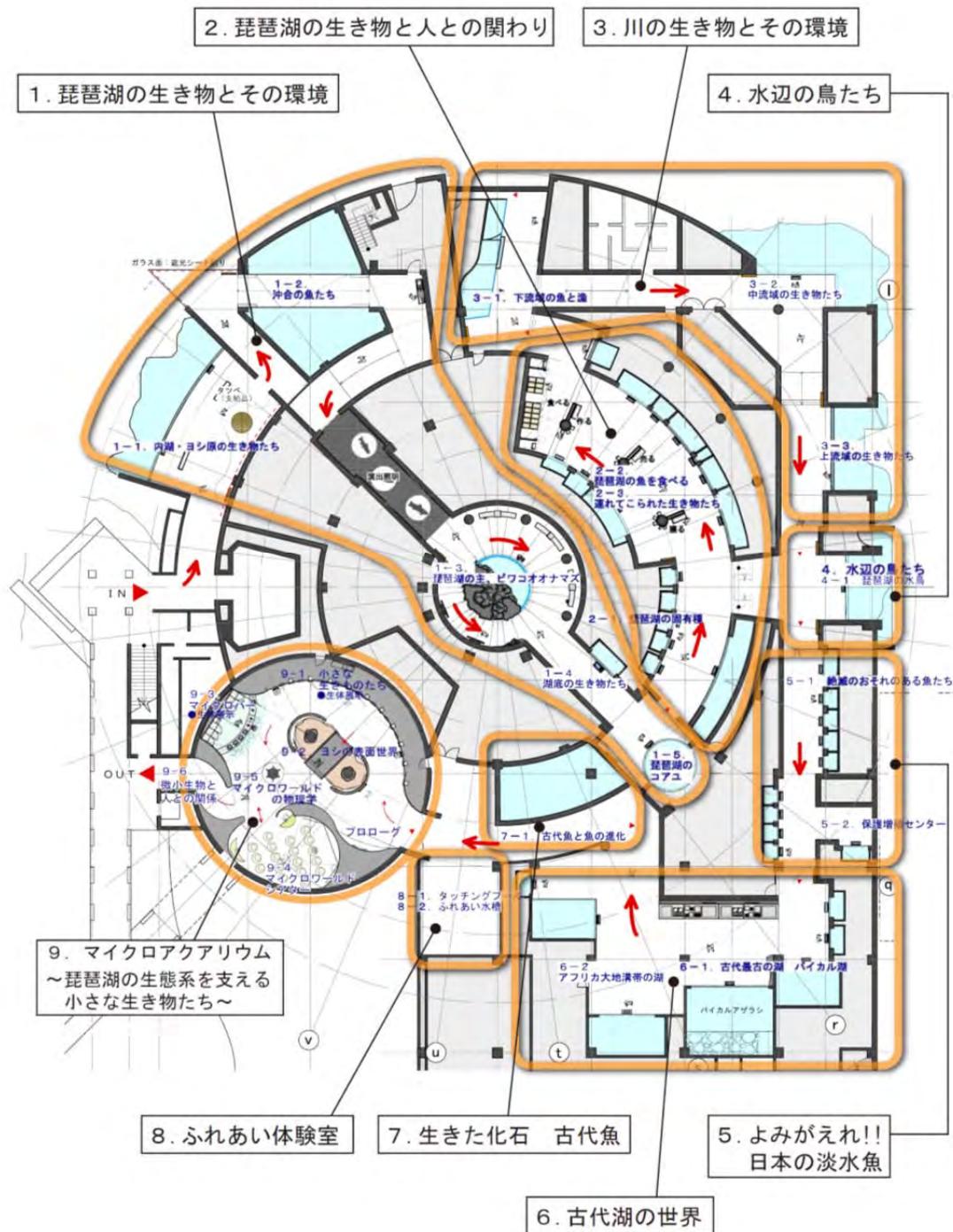
- 日本唯一の古代湖としての琵琶湖の価値を発信するため、世界最古の湖であるバイカル湖やアフリカ地溝帯の湖など、古代湖の生き物、特に固有種(バイカルアザラシ*36など)を中心に比較紹介する



<姿を消しつつある魚と保護増殖センター>

- 日本各地で減少している希少淡水魚の現状を紹介するとともに、国内唯一の施設である保護増殖センターの機能を紹介する

【水族展示室ゾーニングイメージ図】



(2) 見える・伝わる・広がる交流空間・交流機能

★現状

- ・市民参加型の博物館として「はしかけ制度」や「フィールドレポーター」など先進的な取り組みが国内外から注目されてきた
- ・観察会・体験教室・講座等を年間200回以上開催し、楽しみながら学び考え、出会いの場となる交流活動を活発に行ってきた

★課題

- ・大人が日常的に楽しめる魅力に欠ける
- ・多様な交流活動の発信が弱く、魅力が十分に伝わっていない
- ・湖畔の立地条件や屋外空間を十分に生かせていない
- ・制度参加者の固定化、多様化する来館者ニーズへの受け皿が不十分
- ・多人数の団体の屋内での受け入れ場所が不足
- ・環境学習の拠点機能の強化が必要

★こう変わります

- ・大人も楽しめる仕掛け、プログラムを充実します。
- ・展示室や交流空間で来館者に見える交流をします。
- ・樹冠トレイルにより、博物館から琵琶湖、屋外フィールドへ誘います。
- ・だれでも博物館での活動に参加しやすい仕組みをつくります。
- ・学校・一般団体向けの屋内の昼食場所を整備します。
- ・地域での実践を担う「人が育つ」博物館へと進化します。

1) 交流空間

◆大人のディスカバリー ～大人も遊べるリアルな知的空間～

- 大人の興味や探究心に応え、新たな利用者層を呼び込み、繰り返し利用されるコーナーとなります。
- 本物の剥製に触れるなど、感覚で理解するハンズ・オン展示、自ら調べさらに知りたくなるきっかけをふんだんに設けます。
- 博物館スタッフが、博物館の楽しさやいろいろな活動をその場で来館者に伝え交流することで、お互いにさらなる知的好奇心や発見、次なる交流が生まれます。



◆ワクワク体験スペース ～だれでも楽しく体験～

- 家族・カップル・シニア層などどんな人にも、折々に楽しめる多様なプログラムが体験できます。
- はしかけ、フィールドレポーター、地域で活動している人たちが自らの体験や成果を伝え、来館者と直触れ合う交流ができます。



4 展示交流空間の再構築

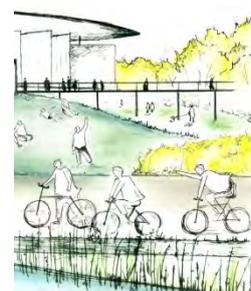
◆レストラン・ショップのアミューズメント機能強化

～地域のオリジナルな魅力を発信～

- 地元産食材や特産品を味わえる特色あるレストランとなります。
- ここにしかないオリジナルグッズや書籍等、琵琶湖博物館ならではの品ぞろえのショップとなります。
- 来館者が観覧や交流の合間にゆったりとくつろげる休憩スペースの充実を図ります。

◆樹冠トレイル ～自然に近づき、琵琶湖を感じる～

- 琵琶湖を渡る風を感じながら屋外展示の森を上からも観察できる空中散歩道を新設します。
- 樹冠トレイルからは琵琶湖が一望でき、琵琶湖との一体感を感じられます。
- 展望台をトレイルの途中に設け、来館の記念撮影スポットとしても利用できます。



◆環境学習センター ～多様な主体とのネットワークを生かす～

- 環境への関心と問題解決能力を高め、主体的に実践・行動できる「人育て・人育ち」において中核的な役割を担い、その先の持続可能な社会づくりを進めるため、環境学習の拠点機能を強化し、多様な主体間の協働・連携を推進します。
 - ① 一人ひとりの暮らしを見つめ直す活動の支援
 - ② 実践行動を支え、広げ、高める人材（リーダー）育成
 - ③ 世代を超えて地域から学びあうプログラム開発
 - ④ 学びをつなぎ、学校と地域をつなぐコーディネート機能
 - ⑤ 多様な主体とのネットワークの形成
 - ⑥ I L E C（国際湖沼環境委員会）と連携した環境学習の国際的展開

◆地域環境活動交流室 ～活動の輪を地域から広げる～

- NPOや団体、はしかけ、フィールドレポーター、博物館スタッフ、地域で活動している人たちの活動場所を設けます。それぞれのグループがお互いに交流し、来館者とも交流することでネットワークが広がる空間とします。

◆学校・団体向け屋内スペース ～団体利用の快適性向上～

- 学校等の大規模団体の利用促進を図るため、利用ニーズの高い昼食スペース、待合・休憩スペース、体験学習も行える多目的なスペースや、障害のある方が利用しやすいユニバーサルデザイン対応の休息スペースを整備します。

2) 交流機能

◆見える、伝わる、広がる参加と交流

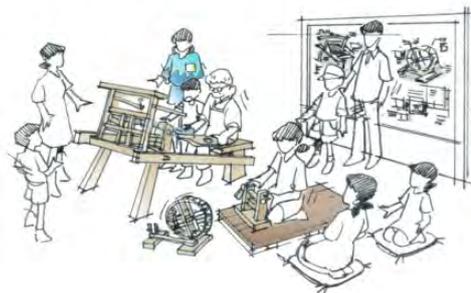
琵琶湖博物館の活動がさらに見えて、伝わり、様々な人びととの多様なつながりを広げていける新しい機会を提供し、交流を広く発信していきます。

○ 博物館から生まれる楽しさが見えて伝わる交流

- ・展示を通して来館者の興味や発見を引き出す、展示室での展示交流員による交流活動を活発にします。
- ・はしかけやフィールドレポーターなど、博物館で活動している人たちの顔が見え、その活動に興味を持つ人だれもが参加したくなる交流を展開します。
- ・博物館で行われている様々な研究や資料収集、展示、交流に参加している人びとの活動を見える形で伝えます。博物館を楽しむ人どうしがふれあい、新たな利用者に広がっていく交流をめざします。

○ 自らを発見し実践できる参加と交流

- ・湖や博物館に興味がある、何かに関わってみたい場合など、だれもが気軽に、多様な関わり方で、個人の能力を発揮することができる場を提供していきます。
- ・琵琶湖博物館のファンであり、サポーターであるような人びとが集まり、それぞれ自分のステップに合わせて学び合い成長し、実践する場を作ります。
- ・「湖と人間」のより良い関係に関心を持ち活動する人びとが集まり、琵琶湖博物館を起点として新たな活動にかかわり、新たな自己を発見し、自己表現をするようになります。将来にわたって利用者と博物館の交流が続いていきます。



◆琵琶湖を感じる・体験する交流

琵琶湖博物館と周辺のフィールドを活用し、フィールドの楽しみ方や発見することのおもしろさを様々な体験・実践を通して伝え、博物館機能の一つである研究も分かりやすく発信していきます。

○ リポートしたくなる、琵琶湖を使ったプログラムの企画・開発

- ・博物館の展示、資料を使った環境学習のプログラムを開発し実施します。また、四季に合わせた展示やフィールドでのプログラムの企画・開発を継続的にを行います。さらに、最新の琵琶湖に関する環境学習の教材提供を行います。利用者がこれらを活用することで、気軽にフィールド活動に踏み出すことができる入り口となります。
- ・プログラムシートはコレクションしたくなるようなものを作成し、リピーターにとっても、毎回違うワークシートを使って展示を見ることで新しい発見ができるものにしていきます。プログラム開発にあたっては学芸員、教員、交流分野の専門スタッフで

4 展示交流空間の再構築

チームをつくり、各対象・研究分野について計画的に企画・制作します。また、地域の人びとの協力も得て、ニーズに合わせたプログラム開発を行います。

○ 標本貸出キットなど地域で使えるアイテムを開発

- ・学校や地域の博物館利用をさらに促進するため、環境学習や地域学習に利用可能なプログラム、標本貸出キットなどを開発します。これまで琵琶湖博物館が収集してきた資料なども取り入れ、より親しみやすく興味がわくものを企画します。

◆地域をつなぐ交流

琵琶湖博物館の持つ個人、地域、学校、NPO、研究機関、行政機関、企業等の様々な主体とのネットワークや蓄積したノウハウを生かして、博物館がつなぎ役となり、地域が育つ交流を応援します。

○ 地域の人びとによる活動を他の人たちに伝え、広める場をつくる

- ・博物館のつながりを生かして学校どうしや地域どうし、また学校と地域をつなぎ、交流の輪を広げ、地域でともに活動していきます。
- ・ICT（情報通信技術）を活用し、博物館や地域の活動情報がメールマガジンやホームページ、アプリなどでだれにでも手軽にアクセスでき、簡単に即時に手に入るようにします。
- ・県内外の博物館との交流を強化し、互いに連携しながら、県内、関西地域にさらに広く、きめ細かく情報を発信していきます。

○ I L E C（国際湖沼環境委員会）や J I C A（国際協力機構）との連携による、資料・情報収集、研究、交流、展示の国際化、地域と海外の人的交流の促進

- ・古代湖である琵琶湖をテーマに海外にも目を向け、国際的な湖沼研究の一拠点として、I L E Cとの連携により研究発信を強化します。また、J I C Aと共同主催している博物館学集中コースの実績や海外博物館との協定関係を生かし、研究や展示、研修などの連携を強化します。



◆利用者とともに成長する交流

- ・リニューアルに向けた計画段階から、利用者とともに考える場を作り、新しい交流と新しい博物館への準備を進めます。参加者がリニューアルに期待をもち、新たな参加者が増え、アイデアやワクワク感をもってさらに楽しく広がり、深まる交流をめざします。
- ・博物館での発見や学びの面白さを楽しく、分かりやすく伝えるためには、コミュニケーションの専門的知識と技能が必要です。また、博物館のおもしろさを広げるには、ネットワークを構築するノウハウや人脈も必要となります。それらの専門性の高いスタッフとともに、交流機能の持続的な発展のための体制を整えていきます。

(1) ICT(情報通信技術)の活用

来館者と博物館、フィールドと展示などをICT(情報通信技術)を活用して快適で楽しくつなぐことにより、だれもが参加しやすく、参加と発見、体験と交流が促進できる環境を整備します。

1) 来館者が快適で楽しく情報を得られるシステムの整備

◆案内情報ディスプレイ(デジタルサイネージ^{*37})の設置

- 館内のイベントや見どころ情報、屋外交流空間の森の様子、地域の旬の情報などをデジタルサイネージで表示します。情報を得やすいように、入口、アトリウムなどわかりやすい場所に工夫して設置します。

◆資料検索システムの設置

- 直観的に見たい資料を楽しく検索できるシステムを整備します。また、来館者の興味に応じて、展示資料の詳しい説明、収蔵資料の検索、動画資料(ビデオ等)の観賞ができるようにします。

◆多言語解説システムの整備

- 複数言語による展示ガイドシステムを整備します。

◆Wi-Fi^{*38}利用可能空間の整備

- 展示に関心を持った来館者が探究心に応じて自分の端末等で必要な情報をタイムリーに調べられるように、Wi-Fi基地を整備します。

2) 展示や交流活動に参加しやすいシステムの整備

◆地域情報の発信交流システムの整備

- 地域と展示室をつなぎ来館者をフィールドへと誘う環境を充実させるため、フィールドレポーターからの地域情報をタイムリーに展示室に届けることができるシステムを整備します。

◆県民参加型調査システムの整備

- 身近な環境を題材にしたフィールド調査に、多くの人びとが手軽に参加できるように、オンライン化した調査システムを整備します。



◆交流活動参加管理システムの整備

- 博物館のイベントに参加しやすいように、インターネット等で観察会や講座などへの予約申込みができるようにします。

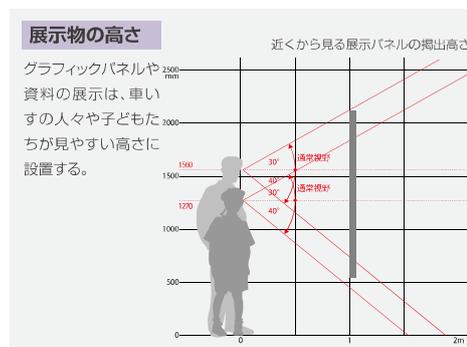
(2) ユニバーサルデザインの推進

- 多様な人が訪れる施設として、だれもが能力を最大限に生かして楽しめるようユニバーサルデザインの考え方に基づく施設づくりを一層推進します。
- わかりやすい動線、段差の改善など、より快適で安全に移動できる空間づくりを行います。
- 視覚障害など障害のある方も博物館を楽しめるよう、視覚型展示だけではなく、さまざまな知覚による体感ができる知覚型展示を取り入れ、また、だれにでも使いやすい設備・機器を導入します。
- わかりやすい館内サイン、読みやすい解説パネル、多言語での対応など、来館者だれもが容易に理解でき、楽に行動できる表示を行います。
- 整備にあたっては、障害のある方や子育て中の方など、多様な人びとが参画するワークショップにおいて使い勝手の良さを検討します。



触覚対応

触って大きさ、形、感触を確認するなどの知覚型ハンズ・オン展示を多く取り入れる



展示物等の高さ

展示物やサイン等を、子どもや車いす使用者など様々な人びとの視点や動線を想定して設置

(3) 利用者の安全に配慮した施設整備、効率的な維持管理

- 通常時や災害発生時において利用者の安全が確保されるよう、既存施設の安全対策を実施します。
- 先進的な環境配慮型システムやモデル的な設備など、エネルギー・コスト・環境負荷の低減や低炭素社会の実現に向けた施設の整備を検討します。
- 予防的な維持保全により施設・設備の長寿命化を図り、維持保全費用を縮減するため、ストックマネジメント*39の考え方を導入し、以下の取り組みを進めます。
 - ① 計画的・効率的な維持保全
施設長寿命化保全計画を作成し、適切な時期に改修などを効率よく実施します。
 - ② 日常の適正な維持管理
日常点検を実施し、不具合の早期発見・早期対応を確実なものとしします。

(1) 地域との連携

- 琵琶湖博物館が地域の中で独自の役割を果たし、地域での存在基盤を確立するため、県民や地域社会とつながる博物館として積極的に地域との連携を推進します。
- 博物館と地域、地域と地域、地域と学校をつなぐ橋渡しとして、これまで築いてきたネットワークを活用し、学習や体験の機会の充実に向けた場づくりを進め、さまざまな地域において体験の機会を提供するとともに、主体間の交流や連携の仕組みづくりを進めます。
- 博物館の知的資源と地域で活動する人びとの知識や活動知見の相互を活用した体験・学習プログラムを地域の人びととともに開発し、実践します。

(2) 学校との連携

- 教育委員会との連携を強化し、学校の博物館利用を促進するとともに、「湖の子*40」、「やまのこ*41」等の学習プログラムとの連携を強化し、博物館を活用した効果的な環境学習を推進します。
- サテライト*42博物館や出前授業など学校や地域での博物館活動を推進し、琵琶湖博物館の学校利用を促進します。
- 過去に博物館を経験した小中学校の教員を中心に、博物館利用に関心がある人のネットワークを構築し、博物館と学校の連携を強化します。
- 博物館の知的資源や施設を生かし、教員研修に協力するとともに、学校で活用できるプログラムを開発し、教員の博物館利用を促進します。
- 関西における環境学習の拠点施設として、流域府県の学校利用を一層促進するため、県外小中学校の教育委員会や校長会等との連携を強化します。

(3) 関係団体との連携

- 複雑化・多様化する環境課題の解決に向け、他の試験研究機関や行政機関との連携を強化し、共同して研究・調査に取り組みます。
- 他の博物館・美術館、特に流域の自然・水族・水に関する博物館と共同事業、セット回遊、相互訪問ツアーなどを実施する博物館・美術館同士の連携を強化し、地域における博物館の魅力・発信力を向上します。
- 地元草津市や烏丸半島にある近隣施設、近隣商業施設等との連携を強化し、イベントの共同開催や広報における協力など、発信力を高め、地域の活性化と集客増を図ります。

(4) 企業・大学との連携

- 企業のCSR*43(企業の社会的責任)活動等の環境保全の取り組みが大きな社会的役割を果たすようになり、「湖と人間」の新しい共存関係を築くうえで、こうした企業は今後重視すべきパートナーとなります。
- これまでいろいろな形で企業連携を行ってきましたが、今後企業との連携を博物館活動に明確に位置づけ、必要な組織・体制を整備することにより、企業とともに「湖と人間」の共存関係を築く新たな活動を展開します。
- 研究施設・環境学習施設・観光施設という多面的な機能を持つ琵琶湖博物館らしさを生かした新しい連携のあり方を企業に提示し、企業との共同研究・研究開発、地域交流活動などの活動の輪を広げ、協力関係を強化します。
- 企業のCSR活動等と連携し、博物館を拠点とした企業の環境保全活動・CSR活動の発信等を行います。博物館と企業が連携することにより、企業の社会貢献活動の発信力が高まることが期待されます。地域貢献を広く知らせる一環として、ネーミングライツなどの支援や資金導入等も検討していきます。
- 企業・大学等と連携してパートナーシップ協定*44を結び、メンバーシップ制度*45を導入することにより、企業・大学等の博物館利用を促進します。また、博物館での研修や活動が大学の単位として認定されるような新たな利用制度を検討します。

(1) 広報・営業活動の強化

平成12年から平成24年の間に来館者数は約14万人減少しましたが、そのほとんどは一般（大人）の来館者です。この状況を打開するため、広報・営業戦略の見直しを進め、できることから実行に移し、集客に向けた努力を行っているところです。

リニューアルにあたっては、琵琶湖博物館の存在や活動、魅力が広く伝わるよう、各方面との連携や協力を強化し、幅広い来館者や琵琶湖博物館ファンの獲得を目指して、展示や事業の見直しを行うとともに、広報・営業活動の強化を図ります。

また、変化の激しい社会で、館の存在を広く示し、地域で親しまれ、より多くの利用者確保するため、「攻め」の広報・営業戦略の展開と、館全職員を「人財」と位置づけ、館の魅力の一つとして積極的にアピールする意識改革と実践を行います。

◆魅力の明確化

○メディアの多様化や情報量の増大、趣味嗜好や関心の多様化にともない、発信する情報が伝えたい人々に届きにくい時代になっており、ターゲットを明確にし、端的な形でアピールできる魅力を持った情報の発信が求められています。

○そのため、琵琶湖博物館の魅力を新たに見出していきながら、さまざまなターゲットに合わせた魅力の開発と伝え方を検討します。特に、研究の中核にある学芸員を、当館ならではの大きな魅力の一つとして、今後の広報の最前線で大きな役割を果たす交流型広報活動を展開します。

◆国内での認知度の向上

○当館の名前を知っている人は県内では90%以上ですが、県外では30%と非常に低い状況です。来観者数の増加を図るためには、まず認知度の向上が必要となります。

○企画展や観察会、「あさ・ひる・ばん博物館」など、話題性のある企画を行い、マスメディアに共催や協賛、後援を働きかけ、効果的な広報により認知度の向上を図ります。

○ホームページを刷新し、博物館での魅力的な体験・イベントをタイムリーに伝え、また、ユーチューブを活用し、生態展示の魅力など動画ならではの臨場感をもった発信に努めます。さらに検索サイトへの登録方法を工夫し、ウェブページ上で琵琶湖博物館が見つけやすい環境を整え、広域的に琵琶湖博物館の認知度の向上に努めます。

○無料情報紙とのタイアップ、ホテルや道の駅、サービスエリアでの周知等、きめ細かくターゲット別に認知度の向上を図ります。

7 効果的な広報・営業活動の展開

◆海外での認知度の向上

- 海外観光客向けにすでにある英文に加え、ホームページを多言語化するとともに、観光客、研究者に向け多言語ガイドブックを作成します。
- 海外交流担当を置き、積極的に海外旅行業者等と連携を推進します。

◆広報・営業スタッフの配置

- 琵琶湖博物館の認知度を向上し、集客を図るためには、学校や旅行業者等関係機関との連携が不可欠となり、相手方と琵琶湖博物館の双方にとってメリットとなる提案型の営業活動の推進が必要となります。このような活動のため専門性の高いスタッフを配置し、戦略的・効果的な広報・営業活動を展開します。

◆びわこビジターズビューロー・旅行業者等との連携

- びわこビジターズビューローをはじめ、県内の観光関連団体等と積極的に情報交換を推進し、キャンペーン・旅行プランの提案を行い、琵琶湖博物館の魅力を伝え、地域観光推進の中に当館を位置づけます。また、教育旅行や国際会議などのニーズについても関係機関と連携しながら対応を検討します。

◆料金体系の検討

- 現状の料金体系や年間パスポートの料金設定、メンバーシップ制度や宿泊施設に配布する割引券などの割引制度を検討し、誘客につなげます。

(2) アクセスの向上

◆琵琶湖博物館へのアクセス（経路）の向上

- 地元草津市、バス会社と連携し、琵琶湖博物館へのアクセスルートにおいて博物館を認知しやすいよう案内表示等の改善を図るとともに、増便交渉を継続します。
- 湖岸に隣接する立地の良さを生かし、湖上交通によるアクセスの向上を検討します。

(1) 事業規模およびスケジュール

新たな知見や技術などを盛り込んで博物館としての魅力を一層向上させ、県民の誇りとなる博物館の実現を目指して展示室をほぼ全面的にリニューアルすることから、他館のリニューアルの㎡単価等を参考に総額を積算すると、20億円～30億円程度の規模が必要となります。今後、実施設計以降において十分に精査するとともに、外部資金の獲得にも積極的に取り組みます。

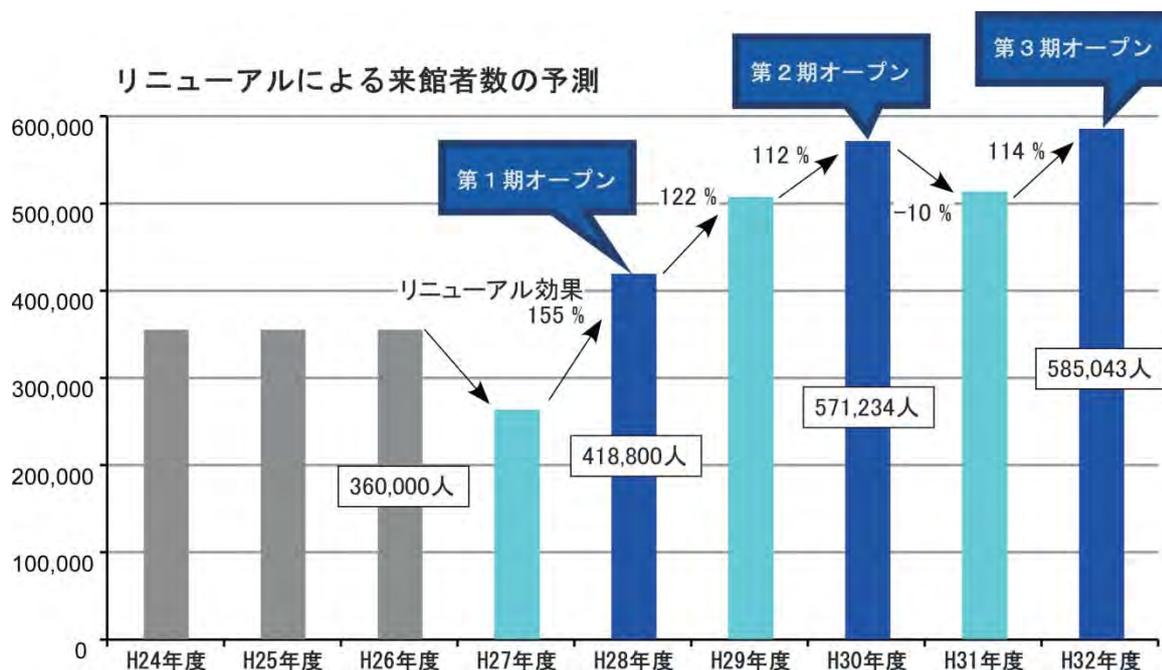
また、リニューアルの実施に当たっては、県の財政状況や来館者の利便性を考慮し、段階的に施工し、工事のための閉館期間はできるだけ短くすることとします。

そのため工程としては、第1期として開館20周年にあたる平成28年度に一定の完成をめざすこととし、水族棟の1階部分の水族展示、2階部分のC展示室を行います。引き続き、平成30年度を目途に第2期、さらに平成32年度を目途に第3期のリニューアルを行います。

平成24年度 平成25年度 平成26年度 平成28年度(開館20周年) 平成30年度 平成32年度
 ビジョン策定 ⇒ 基本計画策定 ⇒ 実施設計 ⇒ 第1期リニューアル ⇒ 第2期リニューアル ⇒ 第3期リニューアル

(2) 来館者数の予測

(1)のようなスケジュールで中位の25億円規模でリニューアルを実施するとして、他館の実績を参考にリニューアル後の増加率を算出すると、開館20周年となる平成28年度の第1期で41万9千人、第2期で交流空間・樹冠トレイルの整備を行うとして平成30年度で57万1千人、第3期でA展示室とB展示室のリニューアルを行うとして平成32年度で58万5千人の来館者が見込まれます。



(3) 経済波及効果

琵琶湖博物館のリニューアルによって、文化的・社会的効果に加えて、公共投資による地域への経済効果や、入館者数増大による地域での消費増加等の経済効果をもたらすと期待されます。これらの経済効果について、「滋賀県経済波及効果分析ツール」を活用し、産業連関表*46による推計を行い、需要の発生による直接投資効果、および他の産業の生産を誘発する波及効果を算出しました。このうち第一次波及効果は、直接効果によって必要な原材料等を満たすために発生するもの、第二次波及効果は、直接効果および第一次波及効果による雇用者所得の増加によるものです。

なお、投資額については中位の総計 25 億円として、入館者数については前述の増加予測をとって推計しました。

整備費を 25 億円とすると、総合効果は 56.99 億円となり(波及効果倍率 2.28 倍)、就業誘発効果は 508 人となります。

		経済効果推計 (百万円)	就業誘発効果 (人)
①整備費効果	直接投資効果	2,500	直接効果 157
	1次波及効果	565	58
	2次波及効果	502	33
	総合効果	3,566	合計 248
	効果倍率	1.43	
②入場者増加効果	直接投資効果	1,543	直接効果 208
	1次波及効果	341	36
	2次波及効果	250	16
	総合効果	2,133	合計 260
	効果倍率	1.23	
合計	総合効果合計	5,699	合計 508
	効果倍率	2.280	

(* 四捨五入のため合計と内訳は必ずしも一致しません)

(4) 博物館の「木」から地域の「森」へ

リニューアルを通して、琵琶湖博物館の発信力・活動機能が強化されることにより、次のような効果が期待され、「湖と人間」の新しい共存関係が築かれた社会が実現します。

◆心に「種」を 一気づきを促し、地域の未来を地域の人びとと考えますー

- 過去から学び、現在を見直し、未来を新たな視点で考える深みのある理解が促進されます
 - ・琵琶湖の自然や環境の歴史を、「いま」とつなげて知り、学ぶことによって、琵琶湖の未来を考えるまなざしが養われます。新琵琶湖博物館には、親しみやすい身近な入り口としての機能と、地域社会へのより高次なかかわりが同時的に用意され、関心や知識の高さによらずそれぞれに合った博物館利用・体験ができ、それぞれの視点で琵琶湖の未来を考えることができます。
- 地域の問題を自分のこととして理解し、琵琶湖の大切さに気づき、誇りに思う人びとが増加します
 - ・新琵琶湖博物館では、多様な人が「琵琶湖」というテーマのもとに集まり、学び合い、交流します。さまざまなプロフィールの人とふれあうことで、知らなかった琵琶湖が発見され、新たな感動が生まれます。そうした積み重ねから、琵琶湖に関わる問題が自分のものとして「自分化」されていき、琵琶湖の、地域の守り人としての自覚が生まれ、深い愛着が培われていきます。

◆「苗」を育てる ー自らの力で活動する人びとを育み、ともに歩みますー

- 博物館利用が促進されることで、次代を担う人が育ちます
 - ・新琵琶湖博物館は、多彩なプログラムやイベントを通じ、人が交流し活動する、生きた博物館となります。利用者は、観覧し、参加するだけでなく、多様な世代との交流・活動を通じて、博物館という場を足がかりに自ら実践・活動するようになり、琵琶湖と地域の文化を深く理解し、行動する人材が新博物館のもとに育っていきます。
- 暮らしの中に博物館が定着し、地域で新たな活動が生まれ、広がります
 - ・暮らしの中に博物館が定着し、地域の人びとと博物館との関わりが深まります。人びとが日常的に博物館を利用することにより、その活動が活発となり、博物館だけにとどまらず、それぞれの地域で新たな活動が生まれます。さらに、その活動は琵琶湖とその集水域から、流域にまで広がります。

◆地域に根ざした木々をつなぎ、発展し続ける「森」へ

- 琵琶湖博物館を拠点とした新しい社会的なネットワークが形成され、「湖と人間」の新しい共存関係が築かれた社会が実現します
- ・ 県民、NPO、企業、学校・大学等多様な主体と琵琶湖博物館がつながり、連携と協働が進むことにより、琵琶湖とその集水域および淀川流域の自然、歴史、暮らしについて理解が深まり、地域の人びととともに「湖と人間」の新しい共存関係が築かれた社会、湖をめぐる博物館の「森」が誕生します。

<新琵琶湖博物館創造検討経過>

【これまでの検討経過】

広く県民、利用者、有識者の意見を聴きながらリニューアルの検討を進めています。

(1) 滋賀県議会環境・農水常任委員会への報告

○滋賀県議会環境・農水常任委員会で検討いただきました。

<平成24年度> 平成24年12月21日 ・平成25年3月11日

<平成25年度> 平成25年5月15日 ・11月13日 ・12月16日 ・平成26年3月12日

(2) 滋賀県立琵琶湖博物館協議会での審議

○博物館法に基づき設置されている琵琶湖博物館協議会において検討いただきました。

<平成24年度> 平成24年10月30日 ・平成25年2月5日

<平成25年度> 平成25年11月6日 ・平成26年3月6日

(3) 県民ワークショップの開催

○学校、企業関係者をはじめ広く琵琶湖博物館の活用について情報交換を行いました。

①「学校と琵琶湖博物館」平成24年11月25日 参加者：大学生等47名

②「企業と琵琶湖博物館」平成25年2月7日 参加者：企業15社等41名

③「明日の琵琶湖博物館をみんなで語ろう」平成26年2月8日 参加者：42名

(4) ピアレビュー(有識者意見聴取)の開催

○有識者より、琵琶湖博物館の課題、リニューアルへの提案等について意見を聴取しました。

① 国際化、ユニバーサルデザインについて 平成24年11月6日

② 当館展示、基礎機能に対する評価、今後の展開等 平成24年11月29日

③ 当館に対する評価、広報戦略等 平成24年12月19日

④ 当館、ビジョンに対する評価、提案等 平成25年3月14日

⑤ 評価システム等 平成25年3月29日

⑥ 当館、ビジョンに対する評価、提案、交流制度等 平成25年3月30日

(5) 新琵琶湖博物館創造基本計画検討会議の開催

○有識者による、専門的・具体的検討のための検討会議を開催しました。

①第1回 日時：平成25年6月20日 ビジョンと基本計画策定に向けて

②第2回 日時：平成25年8月1日・7日 現地視察、現状の議論

③第2-2回 日時：平成25年8月11日 ICT(情報通信技術)について

④第3回 日時：平成25年9月13日 中間とりまとめに向けた検討

⑤第4回 日時：平成25年12月22日 基本計画素案についての検討

⑥第5回 日時：平成26年2月25日 基本計画案についての検討

⑦第5-2回 日時：平成26年3月27日 ICT(情報通信技術)について

(6) アンケート・意見聴取の実施

○来館者アンケートや企業、大学生等にリニューアルに関するアンケートを実施しました。

○インターネットアンケート(600サンプル、県内および京阪神、東海)を行い、利用者・非利用者の傾向、認知度等を調査しました。

○広報アドバイザー、旅行社等から意見を聴取しました。

p. 1

*1 はしかけ

地域の人びとが自主的・主体的に博物館活動に参加する制度。参加者自らが活動を企画・運営し、現在、里山体験や田んぼの生き物調査、発掘調査などを行う 17 のグループがあり、336 名(平成 25 年 12 月末現在)が登録している。

*2 フィールドレポーター

琵琶湖博物館開館時から行っている参加型制度の一つで、地域の人びとが県内の自然やくらしについて、身の回りで調査を行い、その結果を定期的に博物館に報告をする、いわば「地域学芸員」のこと。

*3 マザーレイク 21 計画

琵琶湖を健全な姿で次世代に引き継ぐための指針として、平成 12 年(2000 年)3 月に策定された琵琶湖総合保全整備計画。平成 23 年(2011 年)10 月に第 2 期計画に改定された。

*4 生物多様性

あらゆる生物種の多さと、それらによって成り立っている生態系の豊かさやバランスが保たれている状態を言い、さらに、生物が過去から未来へと伝える遺伝子の多様さまでを含めた幅広い概念。生きものたちの豊かな個性とつながりのこと。生物の種の多様性、種内(遺伝子)の多様性、生態系の多様性の総称。

*5 生態系サービス

生物のつながりによって成り立っている生態系から、「食べ物、空気、気候の制御、住む場所、文化的背景、精神的な安らぎ」など、人間が受けている様々な便益・恩恵のこと。

*6 持続可能社会

人間活動を地球の環境容量内に収めつつ、すべての人々が安全で質の高い生活を享受でき、それが将来世代にも継承される社会。

p. 2

*7 飲水思源

「その実を落とす者はその樹を思い、その流れに飲む者はその源を思う」という、北周の詩人・瘞信の「微調曲」という詩に基づく故事成語。飲み水の源を忘れないようにすること。

p. 4

*8 新種

新しく発見された種で、国際動物命名規約に従い名前をつけ学術雑誌等に報告された種のこと。

*9 新記録種

すでに名前の付いている種（記載種）がその地域で初めて見つかって生息していることが確認され記録された生物種のこと。

*10 保護増殖センター

国内で絶滅の危機に瀕している淡水魚類の飼育や繁殖方法の研究を行っている琵琶湖博物館の施設。飼育生物の自然復帰の方法についても研究をすすめている。

*11 系統保存

絶滅が危惧される生物種について、種内多様性を保存するために、同一系統の交配により繁殖を行い、地域の遺伝的固有性を残すこと。他系統との交雑を生じさせない注意が必要。

*12 研究調査報告書

琵琶湖博物館の学芸員や地域の人びとによって行われた研究成果をまとめた報告書。第1～27号が発行されており、琵琶湖やその周辺地域の情報集・資料集としての役割も持つ。

*13 カイミジンコの新種

カイミジンコは0.3mmから5mmの殻で覆われた小さな水生甲殻類で、近年、世界でまだ見つかっていない新しい種類のいくつかが琵琶湖博物館によって発見された。

*14 企画展示

琵琶湖博物館の研究成果をもとにオリジナル性を重視した有料の展示会。毎年7月～11月に企画展示室で行われる。

*15 ギャラリー展示

収蔵資料の紹介や、他機関や地域の人びとと協力して行う無料の展示会。企画展示以外の時期に企画展示室で行われる。

p. 5

*16 ビオトープ

生物の生息空間のこと。生物が生息しやすいように配慮した人工的につくられた環境をさすこともある。

*17 民具コレクション

琵琶湖博物館が所蔵する昭和53年度～平成7年度に滋賀県教育委員会が収集した資料を中心とする滋賀県下の重要な民具資料。

*18 資料データベース

資料の産地など、各資料に必要な情報を集約したもの。電子化されたデータベースは資料の利用・保管などの管理に重要な役割を果たしている。

*19 電子図鑑

一般の方の学習活動に役立つような形で整備した資料集を、インターネット上で公開している図鑑形式のもの。琵琶湖博物館では、滋賀の魚、滋賀のトンボなどを公開している。

*20 ミエゾウ(の歯)

琵琶湖が誕生した約 400 万年前にいた体高 4m ほどの大型のゾウの仲間。琵琶湖のおいたちの情報が残されている地層から化石として歯や牙などが見つかっている。

*21 マミズクラゲ(飼育記録)

中国原産と考えられている最大直径 3cm 程度の淡水性のクラゲ。神出鬼没で採集が難しく、飼育も難しいとされ、常設での展示をしているところがない。琵琶湖博物館では日本最長の 533 日間の展示に成功した。

p. 6

*22 夏休み自由研究講座

小学生を対象に、自由研究の課題を見つけるきっかけとして標本の採集や調査方法、標本の作り方などをアドバイスする講座。

*23 フロアトーク

常設展示室などで学芸員が展示に関連して 10～30 分程度で話をするイベント。開館日はほぼ毎日行われる。

*24 日仏共同企画

日本の自然史系博物館 5 館（北海道大学総合博物館、国立科学博物館、北九州市立いのちのたび博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、兵庫県立人と自然の博物館）とフランス国立自然史博物館によって、フランスの昆虫学者ファーブルによる『昆虫記』刊行後 100 年を記念し、「ファーブルにまなぶ」展を平成 20 年（2008 年）に巡回で開催した。

p. 8

*25 レファレンス機能

資料や情報を求める利用者に対し、自ら調べたり、求める情報が得られるシステムや窓口が備わっていること。

*26 フィールド

ある興味の対象が存在する現場や、その場がある広がりをもった地域をしめす言葉。屋外に限らない。

p. 9

*27 ユニバーサルデザイン

すべての人が、またどのような状態の時でも利用可能なように、はじめから考えて計画し、実施するとともに、その後もさらに良いものに変えていこうという考え方。

p. 12

*28 時間スケール

時間の長さ規模のこと。

p. 13

*29 展示交流員

券売や安全管理、展示解説も行うが、来館者が展示について自ら新たな発見をする手助けをするなど、来館者と展示物を通じて交流するという役割をもつ、展示をより楽しんでもらうための交流を重視した琵琶湖博物館が最初に始めた制度。

*30 ハンズ・オン展示

展示物がガラスケースに入っていて触れられない「ハンズ・オフ」に対し、観覧者が展示物や展示装置に直に触れられる展示手法のこと。触れたり動かしたりすることで、興味を引き出したり、楽しみを強化することを意図した体験型の展示。

p. 14

*31 氷期

地球上の気候は周期的に変動し、過去90万年間はおよそ10万年の周期があるとされている。その寒い時期を氷期といい、一番最近の氷期は約7～1万数千年前までであり、その最寒冷期は現在の気温より5～10度低かったとされる。

*32 古代湖

数十万から数百万、数千万年もの歴史がある湖のこと。琵琶湖は400万年の歴史がある日本で唯一の古代湖である。その湖にしか生息しない固有種が多く見られ、湖辺にすむ人間の文化にも地域固有のものが見られる。

*33 固有種

地球上で、特定の地域にしか生息しない生物種のこと。琵琶湖には60種以上の固有種がいる。

p. 16

***34 六道**

仏教の教えの一つで、人には6つの迷いの世界があり、それらを六道といい、それら迷いの世界を行ったり来たりしていることを六道輪廻という。

p. 20

***35 ヤナ**

川の中に木や竹でつくるスノコ状の魚をとるための仕掛け。

***36 バイカルアザラシ**

淡水にすむ世界で唯一のアザラシ。バイカル湖（ロシア）とその周辺の川にのみ生息し、体長100-140cm、体重50-90kgと小型。

p. 26

***37 デジタルサイネージ**

電子看板ともいわれる。液晶などのデジタル表示パネルを利用し、表示と通信はデジタル通信でおこなわれるため、表示内容がいつでも変更が可能である。多言語対応や動画なども表示できる。

***38 Wi-Fi**

(ワイファイ) 無線でインターネットに繋がられること。

p. 27

***39 ストックマネジメント**

既存の建築物を有効に活用し、計画的・効率的に維持保全、管理を行って長寿命化を図る体系的な手法。

p. 28

***40 湖の子**

滋賀県内の全ての小学5年生を対象にした学習船「うみのこ」による宿泊体験学習。

***41 やまのこ**

滋賀県内の全ての小学校4年生を対象とした森林環境学習施設およびその周辺森林で行う体験型の学習。

***42 サテライト博物館**

学校で、琵琶湖博物館の展示を学習活動に役立ててもらおうよう、学校と協力して展示を行うもの。平成19年度より実施。

p. 29

***43 CSR**

corporate social responsibility。企業が利益を優先するだけでなく、消費者、顧客、地域社会などとの関係を重視しながら果たす社会的責任。

***44 パートナーシップ協定**

企業や大学等との利用に関する年間契約。

***45 メンバーシップ制度**

所属団体の構成員等に対する優待や割引などの制度。

p. 33

***46 産業連関表**

一定地域の1年間に行われたモノやサービスの流れを、産業間の取引を中心にして一覧表にとりまとめた統計。経済構造や産業間の相互依存関係などを明らかにするとともに、表から導き出される各種係数を利用して経済波及効果の測定・分析などを行うことができる。